



男は 痛い



國友万裕

第43回

『死刑にいたる病』

1. 58歳になって思うこと

誕生日が来て58歳になった。

いよいよ人生の先が見えてきた。普通の会社員だったら60が定年というところが多い。その後再雇用で65くらいまで伸ばす人は多いだろうが、もう引退間近の年齢である。俺は大学で働いているので定年は普通の仕事よりも遅いが、刻々と、少しずつ肩の荷が降りてきた。

この連載を始めて、早くも10年ぐらいが過ぎていく。本当のことを言えば、もっとここに綴りたい生々しい出来事はたくさんあるのだ。しかし、それを書いてしまうと流石に知り合いの人に知られた時が怖い(笑)。そろそろ、連載の体裁を変えようかとも思うのだが、忙しいので、なかなかその踏ん切りもつかない。

「男は痛い！」というタイトルはそろそろ返上しなくてはならないかと思っている。今の世の中は男と女を分ける時代じゃない。この頃は大学の名簿でも男女を区別する表記はしなくなっている。ここ数年、急速にLGBTの人権や多様性を求める政策があちこちで見られるようになって、ベルリン映画祭も男優賞と女優賞の区別を廃止した。

「男は痛い！」ではなく、「俺は痛い！」というタイトルにしなければ社会の流れに呼応できないと感じるようになった。事実、今の俺は別に男だから痛いというわけではないからだ。むしろ、俺はノンバイナリーなんじゃないかなあとこの頃思っている。俺は別に体を女に変えたい、女装をしたいという願望はない。むしろ、男っぽくない人生を歩んできたので、見た目くらいは男っぽくなりたいという願望がある。しかし、それでは男っぽいジェンダーの男なのかというと決してそうではないのだ。俺は長年にわたってジェンダーに囚われ、自分の男性性の部分で気に食わないところは全て削ぎ落としてきている。男女どちらにも属さないジェンダーなのだ。

そもそも、最近は男・女という言い方すら気恥

ずかしい時代になってしまった。多様性の概念が広がってきたため、男でも女でも色々な人がいるという部分の方が大きくなっているように思える。この頃は、性別の欄も、「男・女・その他」と書かれているところが増えている。もはや、「男は・・・」「女は・・・」という言い方は過去の遺物なのだ。閑話休題。

58歳になって、急に歳をとったような気持ちだ。やはりもう人生を逆算して考える歳になってしまったのだ。

最近になって、俺の身边は変わっただろうか？

先日、母に久しぶりに電話。俺が Facebook に「GW、誰か遊びに来てください！」と書いてしまったため「あんたあんなこと書くと変なおじさんと思われるよ」と母の声。母は

84歳だ。70代くらいまでは忙しかったのが、最近になってすっかり隠居生活。50年乗った車も廃車し、まったくのお婆さん生活である。それで暇になったせいか、最近本当に口喧しくなった。

いつまで元気でいてくれるのか。電話の声は極めて元気だが、いつ何があってもおかしくない歳だ。あれこれ心配にもなるのだった。俺もおじいさんだしなあ。

俺がこのところ我ながら成長したと思うのは、ご飯を綺麗に食べるようになったことだ。俺の周りは体育系の人が多いので、一緒に食事をすると食べ方が綺麗なことに感嘆させられる。体育系のクラブだと合宿でそういう教育をされるらしい。俺は教え子の体育系の男の子と食事をすることが多いので、彼らにあやかろうと思うようになって、ご飯は一粒も残さない、お汁は最後まで吸う、という習慣がついてきた。これはいい傾向なのだろう。

それにしても、こういう些細なことしか起きないのだ。大事件が起きて今の生活が崩れるのは、それはそれで困るのだけど……。この頃、ちょっと車が横から走ってくると、「俺の人生これで終わりになるのか」という思いが頭をよぎる。学生と話をすると60まで生きることができればいい

という。彼らからしてみれば、60なんてまだ先の先の先。どういう自分になっているかなんて想像したこともないのだろう。意外に若いものなのに。

非常勤の身でありながら、どうにか58歳まで辿り着けた。40代くらいまではまだ先が長いので、いつまで非常勤でやっていけるのかという不安があったのだが、いまはそれも超越してしまった。俺が教えている大学の中で、一番定年が遅いところが73歳なので、長くても15年がんばれば全て終わる。15年なんてあっという間に過ぎる。もう人生を生きたという思いもあるし、諦念の思いもある。後悔はないけど、なんとなく虚しい。そういう気持ちでいるのだった。もう大きな事件も起きないだろう。あるとしたら病気？ それはないことを祈りたいのだが。

前回の連載で、男性は、覇権的男性、共犯的男性、従属的男性、周縁的男性に分けられるという説を紹介したが、俺は結局周縁的男性のままで一生を終えていくのだ。それはそれで仕方がない。しかし、もしできたら、周縁ではない男性になってみたかったとも思うのだった。

2. 俺の人生カレンダー

『一度しかない人生をどう生きるかがわかる100年カレンダー』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）という本を発見した。この本によれば、男の健康寿命は72・14歳なのだそう。平均寿命は80歳を超えているが、健康でいれるのはあと14年と考えたほうがいいのか。

この本に従って、俺のこれまでの人生の大きなイベントを考えてみる。まず、俺の人生の歴史を辿ってみよう。

1964年2月27日。九州に生まれる。

1973年。小学校4年生になるときに組み替えがあり、超男根主義的な女性の先生が担任になる。その後3年間、この先生の支配下に置かれる。この女の先生との出会いは俺にとっては最大の不幸

だった。

1978年。14歳。中学入学後、女子から「気持ち悪い」と言われ続け、しだいに学校嫌いになっていっていたが、ここで決定的な不幸な出会いが起きた。超男根主義的体育教師との出会いである。夏のプールの時間は男子全員髪を切るように強制し、その後、秋からは男子全員を上半身裸で授業を受けさせられる。冬になっても裸教育は終わらない。俺の心は壊れていった。

1979年。4月、不登校になった。

1980年。高校をやめて、通信制の高校に移った。

1983年。R大学に入学し、京都に移住。この頃、気持ちは前向きだったが、女子学生からの白眼視と悪口に悩まされる学生生活だった。

1985年。スポーツ音痴を解消するためプールに通い始める。

1987年。大学卒業間際に、ゼミの先生から（今で言えば）アカハラを受けて、R大学と決別。K大学の院に行くことになる。

1988年9月。K大学の留学制度で奨学金を得て、アメリカ、ワシントン州の大学に留学。

1989年。帰国

1990年。当時、K大学には博士課程がなかったため、兵庫の大学の博士課程に入学。京都から3年間兵庫まで通った。3年間はプールと図書館のみで、ほとんど引きこもりだった。

1993年。K大学で非常勤のコマが見つかって、仕事を始めた。それまでほとんどバイトの経験すらなかった。

1994年。非常勤の仕事が増えて、K大学に加えて、大阪の大学2校でも仕事するようになる。どうにか収入は増えるが、まだ親がかりだった。

1998年。34歳の誕生日の前日、父が亡くなる。秋、伊藤公雄さんと初めて会い、ドーンフェスティバルで中村正さんがコーディネーターする非暴力プロジェクトに参加。

1999年。35歳。伊藤さんや正さんも関わっていらした男性グループでメディアのプロジェクトに参加。1年間べったり通い詰める。10月、上の

弟が死去。俺の人生最大の悲劇である。この後、徐々に男性グループの人たちとの関係が悪化。

2000年。36歳。無事、プロジェクトの報告書が出る。しかし、その秋、そのグループのリーダーと大喧嘩。憎しみが残るような別れとなった。当時確執を起こした人とはまだ今でも修復できていない。仕事は4大学（京都3大学、大阪1大学）で教えていた。

2002年。38歳。このまま非常勤を続けても先が見えないと思い、翻訳家の道を探そうと大阪の大学の非常勤をやめ、京都の大学のみとなったため収入が激減。何も払えない極貧生活が続く。その後2年くらいは苦しかった。

2004年。40歳。大学に加えて外国語専門学校で教えることになり、教えるコマが増えたせいで、生活にはゆとりがでる。

2005年。41歳。映画研究では有名な加藤幹郎先生と知り合い、映画の学会に参加するようになる。

2007年（?）。定かではないのだが43歳ごろ、この当時から先の男性グループで一緒だった男性が行っている山科のグループに通うようになる。ミニコミの作成などに関わる。

2011年。47歳。ここで山科のグループのリーダーの人と上手くいけなくなり、決別。7月、最初の単著『マッチョになりたい！？世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』（彩流社）を上梓。

2014年。50歳。新書『BL時代の男子学』（近代映画社）を上梓。

2017年。53歳。キリスト教の勉強を始める。

2019年。55歳。キリスト教の勉強で知り合った牧師先生のツアーで、夏休みにアメリカ、ナッシュビルへと旅をする。楽しかった。

2020年。56歳。コロナで大パニック。秋から教え子の家族が経営するボクシングジムに通い始める。

2021年。57歳。3月『マスキュリティで読む

21世紀アメリカ映画』（英宝社）を上梓。2022

年。58歳。3月末で、それまで29年間お世話

になった K 大学（学生の頃から合わせるともつと長く）を退職。

現在は京都の 5 つの大学で非常勤（嘱託）講師を務める。

3. 俺の生活の割合

『一度しかない人生をどう生きるかがわかる 100 年カレンダー』では、さらに次の 6 つの指標を基に自分の生活の割合を考え直すことが書かれている。

1. Output（仕事）
2. Mother Earth（家族・人間関係）
3. Belonging（金・物）
4. Tool（健康）
5. Input（学び・勉強・資格）
6. New World（趣味）

Output にはボランティアなども含まれているとのことで、そうすると男性運動もこれに含まれるのだろう。俺は仕事は講師、翻訳、文筆、ジェンダーなどの運動である。映画と英語が専門なので、それを社会にアウトプットしてきている。わずかだけでも笑。

Mother Earth に関しては、30 代くらいまではほとんど友達もいなかったのが 40 代になってからどっと増えた。当時関わっていた山科のグループで一緒にいる男性からも、「國友さん、交際範囲広くていいですねー」と言われたものだった。アラ還になった今は、誰かにかまってもらいたいという思いがある一方で、人間関係が広すぎると体力がもたないと思うようになった。

Belonging に関しては、20 代はほとんど親と奨学金だった。30 代くらいまでは、親に無心したり、借金したりでほとんど蓄えがなかったのが、40 代になってから余裕が出てきて、わずかながら貯金もできるようになった。大学院の頃にもらっていた奨学金の返還も完済した。いつの間にか非常勤

でも生活には困らなくなった。

Tool に関しては、正常眼圧緑内障が俺の持病だ。それと不眠なので睡眠導入剤はいまでも飲んでいいる。他はトイレが近くなったこと、49 歳のときに怪我をして初めて全身麻酔の手術をして、その後も左腕にわずかに傷みが残っていることだろうか。

Input は、水泳は 21 の時から長くやってきたが、こしばらくは泳いでいない。泳ぎは一旦覚えれば忘れることはないだろうし、今は休憩時間だ。その代わりに、今はボクシングに通っているが、月 2、3 回のペースなので、もっと増やさなくては！資格は 23 歳のときに英語検定一級をとった。勉強は仕事柄たくさんしてきた。

New World は、水泳やボクシング以外では、映画や読書だがこれも仕事の一環である。趣味と実益を兼ねているのでその意味では幸せだ。1 年前から教会に通うようになり、最近、聖歌隊に参加するようになって、歌も練習するようになった。今の New World はこの聖歌隊だろう。

この本では、さらに 6 つの項目を何%の割合でやっているかを分析することが指示されている。俺はというと、仕事、趣味、学びがほとんど重なっている。この 3 つすべてを合わせて、生活全体の 90%を占めている。

4. 俺の過去・現在・未来

その他、さらにこの本に書かれていることにしたがって、俺の人生を分析してみる。

① 手に入れた物・手に入れられなかった物

手に入れたものは具体的には著書である。俺は 3 冊単著を出した。その他共著やテキストも合わせれば、もっとたくさん本をだしている。もちろん、ベストセラーになるような本ではない、印税もほとんど入っていないが、自分のしたことが形になることで自己満足は満たされる。

俺はこだわりが強いので、どうしても自分と合わないところで暮らしたくないため、ほとんど就

活もしていない。結果として、大学の専任職は得られなかったが、京都での生活が手に入った。今は5大学で教えていて、これから定年まで続けられれば、御の字である。

一方、俺がこれまで全く無縁だったのは、何よりも覇権男性の地位である。共犯的男性であつてもかまわない。少なくとも男としての規範から外れていない地位につくことはついぞなかったのだ。もちろん、権力や家族は俺にとってはそれほど重要なことではない。子供の頃からそれが欲しかったわけではない。むしろ、そういう社会通念に反発していた。ただ、そういう世間一般で幸せの指標とされるようなものを持っている人は、ある面楽だろうなあと思っていた。俺は自分のこだわりをまっとうしてきたが、そのせいで、世間一般の幸せの基準からははずれた生き方をしてしまっている。

もちろん、この頃は世間の価値観も多様化しているのだから、それはそれでいいだろう。人生は何もかも手に入るということはない。俺は男性運動に関わってきたし、キリスト教にも関わっている。権力なんて握ってしまったら、男性運動の趣旨ともキリスト教的な生き方からも外れてしまう。

かつては、結婚して、家庭を持って、社会的地位も得るのが男の幸せという社会通念は大きかった。

今から10年以上も前のことだ。俺はその当時ブログをやっているところに俺のブログのファンになってくれた女の人がコメントしてくれていた。彼女は、年はおそらく俺より10くらい上。彼女はとても真面目な人で、正しさを求める人。世の中の人に偏見をもってはならないのだという考え方だった。俺が偏ったことを書くと、「そんな考えだと大事なものを見失いますよ」とコメントが来たりもしたものだ。

ところが、その彼女でも結婚問題となるともろ偏見が出るのだ。「あなたが悩むのは女性がないせいだと思います」「ソクラテスの悪妻という言葉もある通りで、結婚したら、成長は間違いありま

せん」「あなたに必要なものは向かい合ってくれる人だと思います」と俺をどうにか結婚させたいと思っているという雰囲気だった。

10年以上前なので、まだカップル幻想を抱く女性が多かったのだろうが、それにしても普段は真面目で、偏見や差別を許さない人が、結婚にだけはもろ偏見をもっているというのは不思議だった。

しかし、この10年間で世の中も大きく変わった。もはや若い女の子でも結婚したくないと言っている人が多い時代だ。もはや結婚や社会的成功が幸せの指標ではないのだ。

これから残された人生どう生きるのか。

俺は、これまで勉強してきた証として、どこかの大学で博士号が欲しい。しかし、仕事をしている間は忙しくて無理である。だから、70くらいになって、仕事が暇になったら、どこかでとろうかと思っている。

次に欲しいものは、自分の居場所だ。俺はこれから一生京都で暮らしても構わないのだが、老後は東京で暮らしてみたいという思いもある。元々は東京志向だったのだ。70過ぎになって、老人ホームに入るようになったら思い切って東京というのもありだろう。おそらく70くらいになるとすることがなくなる、東京に行けば、したいことがたくさんできそうな気がする。年寄りだからこそ、大都会で刺激に満ちた生活をするのも悪くないだろう。

②これから会える人・会いたい人

しばらく会っていない人で会いたい人となれば、鍼灸師の先生だ。10年ほど前その先生は東京にさっつかれた。しばらくは東京に会いに行ったりもしていたのだが、しばらく経って、連絡がつかなくなった。電話番号も変わってしまっているし、メールアドレスも変わっている。京都の実家はすぐ近所で、お母さんはまだそこに住んでいるので、強引に会うことは可能だろうが、もう会いたくないという意思表示なのだろうか。

とてもいい人だった。娘のことを考えて、自己

犠牲的に生きられているのだろう。あの先生が幸せでいてくれることを願うのみである。

③何に飲みたいか？

喜びを感じるのは、かつての教え子の男の子たちと会うときだ。ボクシングジムで体を動かしている時もしんどいけれど幸せを感じる。

嫌いな時間は、記憶に悩まされる時間だ。この本では、「嫌いな時間は無駄な時間」と書かれている。嫌いな記憶を思い出すのは、まったく無駄なわけだからそういう習慣を断捨離したいとは思っているが、これがなかなか難しい。

④時間をかけてきたこと・お金をかけてきたこと 映画とジェンダーである。

⑤許せないことは、何だろうか

許せない人はこの連載に幾度も書いてきた通り何人もいる。俺に対して悪意的な人だけではなく、好意的だった人でも許せない人はいる。

この本ではいつまでに忘れるという日時をセッティングすることが指示されている。60に設定したいと思う。還暦までにはどうにか忘れなくては！

⑥後悔していることは何だろうか

後悔というわけでもないが、社会運動に参加したことは俺にとっては因果なできごとだった。

結局、俺は、社会運動は向いていない。そのことを切に感じる。R 大学も俺たちの頃は学生運動のイメージが強く、俺はそれに対する反発が強かった。しかし、あの頃は学生大会にも1回も参加せず、ただ傍観していただけのことだった。

30代になって、実際に社会運動に参加してみて、2度にわたる確執。俺はつくづく、社会運動とは相性が悪いらしい。いろいろな勉強にはなったから、そのことに感謝もしているが、俺のアイデンティティではなかったのだった。

幸い、俺は専門が映画とジェンダー。映画が間

に入るため、伊藤さんや正さんほど反発されるということはない。

⑦自分は誰として生きるのか？

これからは誰を恨むでもなく、誰かと競争するでもなく、日々をひたすら生きていきたい。幸い、今は支えになってくれる友人もいる。

6. 『死刑にいたる病』(白石和彌監督・2022)

阿部サダヲがシリアルキラーの役を演じている。彼の存在感が強いので、彼が主役なのかと思っていたら、むしろ主役は岡田健史。

彼が死刑が確定しているシリアルキラーとやり取りしていくなかで、自分の生育歴のことも辿っていく話である。話があまりにも暗すぎて、重すぎて、ここまで酷い話にすることはなかったようにも思うのだが、あれこれ現代的な問題は網羅されている。虐待を受けてきた人間にしかわからない苦しみの話だ。俺だって、多数の女性たちと数人の男性から迫害を受けてきているので、その気持ちはすごく共感できる。

前半は世の中にはこういうどうしようもないトラウマや被害者意識を抱えて生きている人もいるのだということを知ってもらうにはいいようにも思ったのだが、だとしたら、後半の展開に問題がありである。あれだと、逆にトラウマ的な人に対する偏見をもたらすのでは???これ以上書くとネタバレになるので、あとは映画館で確認してもらいたい。

ただ、見る価値がない映画ではない。何よりも興味深いのは、阿部サダヲ演じるシリアルキラーが、高校生ぐらいの制服姿の子だけをターゲットにしていたという部分だ。男とか女は関係なくそういう子だけを生贄にするその部分は面白いと思った。面白いと言っただけは不謹慎だけど。

刑務所での、岡田健史とのやり取りの場面で、お互いの指がふれあって、ひょっとして同性愛なのかと思うのだが、そうでもない。そのどっちつ

かすのところがいい。

これからはセクシュアリティやジェンダーは二の次。この殺人鬼は性別よりも年齢や制服で相手を選んでいるのだ。高校生フェチ、制服フェチともいうべきか。それが好ましいかどうかは別として、とりあえず、人間の性は多様。

そういう認識を世間の人をもつようになったのだとしたら、進化である。